

陳情書

平成 29 年 2 月 6 日

中野区議会 議長殿

区役所・サンプラザ地区の再整備を独自性・先進性に富むものとするについて

公益社団法人 日本建築家協会(JIA) 関東甲信越支部 中野地域会

代表 小西 敏正

中野区若宮 1 丁目 6 番 13 号

- 主旨：1. 中野の文化・アイデンティティを継承発展させる、区民が誇れる意匠・計画とされたい。
2. 敷地の持つ生活空間としての可能性、近隣街区との連動性を探求して頂きたい。
3. 事業スケールに無理がないよう、機能の可変性などでリスクを回避し、立地の特性も十分に活かして頂きたい。
4. 「2050 年に向けた地球環境対策」への適合を図って頂きたい。
5. アイディア・コンクールや学校等でのワークショップ、入居企業や店舗向けのワークショップ、完成後の入居者・利用者の組織・活動の事前始動など、利用者・生活者との双方向性や透明性を高める工夫をして頂きたい。

理由：

弊会は 2014 年 8 月に「中野サンプラザの活用に関する要望書」を区に提出し、その中で、再活用を通じて広く世に中野の独自性・先進性を示すよう求めました。今般、「中野サンプラザ」そのものの再活用は実現できないという推移を踏まえ、中野の独自性・先進性への挑戦を「区役所・サンプラザ地区再整備」の今年からの具体的計画の策定にて、以下のように受け継ぐべきと考えます。

1. 中野の文化やアイデンティティを継承・発展させ、区民が永く誇れる計画とすべきである。

1-a シンボル性、イメージしやすさ

一見ただけで中野と分かる、他所とは類似しない、質の高い建築造形が求められる。 現在の中野サンプラザは全国的な認知度があるが、新たな施設もこれを超えるシンボル性さらには芸術性を備え、中野を全国へ、そして世界へと発信することが望まれる。

1-b 周辺地域のスケール感覚やまちの表情との一体感

中野の現在の賑わいの特徴である人間的スケール感覚を新しい街区に取り込むべきである。中野の猥雑さという魅力を許容する、新しい開発手法・感性が望まれる。

1-c 中野のまちの記憶を未来へとつなぐ、歴史との連続性

歴史の厚みを感じられない、新しさだけのまちには持続的な魅力は期待できない。人々の記憶を随所に取り込む配慮が必要である。

2. 敷地の持つ生活空間としての可能性、近隣街区との連動性をさらに探求すべきである。

現サンプラザが中野通りに対し屏風状の壁になったことの反省の上に、イベント時の混雑

を緩衝する空間の確保のみならず、大小の個店舗の配置などを通じ、回遊性の強化や飽きの来ない体験提供、また中野通りの両岸のバランスの確保が必要である。

3. 事業のスケールに無理が無いよう、機能の可変性などリスク回避の方法を検討すべきである。

超高層であることの訴求力は既に失われており、高層ビルを建てれば事業性が確保できるという考え方は、今後の人口や企業活動の変化によるリスクにさらされる。中野ではクリエイター向けの小型オフィス、ソーホー型の住戸などのニーズを取り込むことが有効と考えられ、またホールも規模を誇るよりは中野区独自の特徴が必要である。余剰キャパシティが事業リスクになることもあるので、計画の各要素とも立地の特性を活かし可変性を組み込むなど、中野のまちを持続可能にするための検討が不可欠である。

4. 「2050年に向けた地球環境対策」への適合を図るべきである。

現在先進各国は、洞爺湖サミットにて日本が提唱した 2050年に向けた地球環境対策を正式な目標として対応を進めており、本計画もこの水準への対応が必要である。

5. 計画中から区民・社会の関心を高め、地元との一体感を醸成し事業の円滑化を図るべきである。

アイデア・コンクールや学校等でのワークショップ、入居企業や店舗向けのワークショップ、完成後の入居者・利用者の組織・活動の事前始動など、利用者・生活者との双方向性があり透明性が高い計画の進め方が必要である。

なお 日本建築家協会では、これらの実現に向けて 公益社団法人としての出来る限りの協力をさせて頂く所存です。

敬具